第３章　各地区の社寺建築の概要

①日本海沿岸東部地区

本地区は市町村合併前の旧美保関町および旧島根町によって構成される。島根半島の東半部分で、北は日本海に、東端は美保湾に面する。海岸線は複雑に入り組むリアス式海岸が広がり、それぞれの小規模な湾には漁業を主生業とした集落が営まれている。また旧島根町地域では、日本海へ流れる小河川に沿っても集落が形成されている。これらの各集落内において寺院および神社が確認された。確認された物件数は寺院系 86 棟、神社系 254 棟、合計 340 棟である。

寺　院　宗教法人登録されている寺院は15件ある。宗派別内訳は、浄土宗（４）、臨済宗（４）、曹洞宗（５）、真宗大谷派（１）、日蓮宗（１）となる。宗教法人登録のない堂舎では、地蔵堂、阿弥陀堂等が確認されいる。当地区では、平安末期以降庶民層に多くの支持を得た浄土宗と、尼子及び堀尾氏が帰依・保護した臨済宗・曹洞宗の寺院が多い。特に、旧美保関町区域では、浄土宗・曹洞宗の寺院を中心とするのに対し、旧島根町は臨済宗の寺院が中心である。

大規模な伽藍を備える寺院は、應海寺（559：島根町加賀）がある。本堂（559-01：明治）（図 3-1-2）は、桁行６間半、梁間５間半の建築で、庫裏との間に玄関を設け、本堂と庫裏とを接続する。この他、鐘楼、開山堂等の建築も備える。建築年代はいずれも明治以降と、近世に遡るものは見られないが、かつての伽藍を踏襲していると考えられ、当地区を代表する寺院のひとつといえる。

当地区における本堂建築は、そのほとんどが方丈型本堂で、桁行６間前後、入母屋造平入、桟瓦葺の標準的な形式のものである。年代は 19 世紀前期から明治頃で、18 世紀以前の建築は確認されなかった。

本堂庫裏一体型は４棟確認した。そのなかでも瑞光寺本堂・庫裏（552-01：島根町大芦：文久３年）（図 3-1-3）は桁行 12 間と長大な建築である。向かって左側６間分を本堂とし、その右に式台を設け、さらに右側を庫裏とする。式台および庫裏の部分は二階建とする点も注目される。松江市内の本堂庫裏一体型の中でも大規模の事例である。

本堂建築以外で年代の古いものは、大日堂（640-03：美保関七類：18 世紀前期）（図 3-1-4）がある。桁行３間、梁間２間、寄棟造、桟瓦葺の小規模な堂で、後世に改変されているようであるが、頭貫木鼻や拳鼻の絵様は古式を示している。

神　社　当地区を代表する神社として、美保神社（615：美保関町美保関）がある。本殿（615-14：文化 10 年）は国の重要文化財に指定されており、切妻造妻入の社殿を横に２棟並列させ、それぞれに木階を設け、階隠は２棟を一体に平入の片流れ屋根を架ける、いわゆる美保造（比翼大社造）と呼ばれる形式である。また、拝殿、神門、社務所、南北回廊、神饌所など、昭和３年に境内全体を整備した際に造られた建築群は、質の高い近代和風建築として注目される。

美保関町には、美保造の簡易版ともいえる三保神社本殿（603-05：美保関町福浦：天保７年）の他、同じように同形式の本殿を２棟左右に並べる諏訪神社本殿（630-03・04 美保関町雲津：昭和 63 年）がある。ただし、建物自体には細かな形式が異なる部分が多く、その伝

図 3-1-1　①日本海沿岸東部地区分布図

播については考察の余地が残る。

このような特異な形式がある一方で、当地区の本殿形式は切妻造妻入の社殿がその大半を占める。本殿建築全55棟のうち、切妻造妻入の社殿は45棟を数える。そのうち40棟が桁行1間の社殿で、桁行2間のものは5棟のみである。このうち年代の古いものとしては、質留比神社本殿（641-04：美保関町七類：18世紀中期）（図3-1-5）が、18世紀中期ともっとも古い。

この他の本殿形式として、流造が5棟、隅木入春日造が1棟ある。

流造の本殿は、一間社が2棟、二間社が3棟ある。年代の古いものとして、加賀神社本殿（560-05：島根町加賀：18世紀後期）（図3-1-6）がある。身舎部分は組物や絵様を用いない形式で、身舎柱と庇柱間の繋梁に用いられた絵様は古式を示す。ただし全体として材の調子が新しく、年代が下る可能性もある。

隅木入春日造の本殿は1棟確認した。伊奈阿気神社本殿（655-04：美保関町北浦：19世紀中期）（図3-1-7）は、一間社で、木鼻の丸彫り彫刻や、妻面の龍の彫刻など、彫刻を多用した装飾性の高い社殿である。

図3-1-2　應海寺本堂（559-01）

図3-1-3　瑞光寺本堂・庫裏（552-01）

図3-1-4　大日堂（640-03）

図3-1-5　質留比神社本殿（641-04）

図3-1-6　加賀神社本殿（560-05）

図3-1-7　伊奈阿気神社本殿（655-04）

②日本海沿岸西部地区

当地区は、鹿島、秋鹿、大野の３つの公民館区を含む。松江市北西部のうち日本海に面する地域で、昭和35 年に松江市に編入された旧秋鹿村、旧大野村と、平成 17 年に合併した旧鹿島町にあたる。秋鹿、大野公民館区の南側は宍道湖に面している。

確認された物件数は寺院系 111 棟、神社系 221 棟、合計 332 棟である。

寺　院　宗教法人登録されている寺院は14件ある。宗派別内訳は、真言宗（４）、曹洞宗（４）、臨済宗（６）で、禅宗寺院の割合が高い。そのうち、曹洞宗の寺院はすべて旧鹿島町内に位置する。真言宗、臨済宗の寺院は、全域に分布する。宗教法人登録外の寺院では、地蔵堂、大日堂、阿弥陀堂などが確認されている。

宗教法人番号をもつ寺院の内、仏堂型の本堂は４棟確認した。年代の古いものとしては、高祖寺本堂（157-01：秋鹿町：延享２年）（図 3-2-2）がある。桁行３間の密教寺院における三間堂建築である。松江市においても仏堂型本殿として古い部類に含まれる。この他近世の建物として、朝日寺本堂（498-01：鹿島町佐陀本郷：19 世紀中期）がある。

方丈型本堂は９棟確認した。ほとんどが禅宗方丈である。年代の古いものとしては、南正寺本堂（532-01：鹿島町南講武：18 世紀中期）（図 3-2-3）、観潮寺本堂（536-01：鹿島町御津：18 世紀中期）（図 3-2-4）、善福寺本堂（524-01：鹿島町佐陀本郷：19 世紀前期）があり、近世に遡るとみられるが、それ以外は大正以降に建てられたものである。

本堂庫裏一体型は２棟確認した。常楽寺本堂・庫裏（542-01：鹿島町上講武：明治）（図 3-2-5）は、本堂と庫裏のみが一体化した形式で、玄関部に相当する部分はない。本堂部分も、向拝を縁に納めており、全体として簡素化している。

神　社　宗教法人登録されている神社は 19 件である。国の重要文化財である佐太神社本殿３棟（529-06・10・18：鹿島町佐陀宮内：文化４年）と、県指定文化財の内神社本殿（179-03：大垣町：安政２年）の４棟は大社造の本殿建築で、当地区を代表する社殿である。

大社造以外の切妻造妻入の社殿は 30 棟あり、桁行１間のものが 27 棟、桁行２間のものが３棟である。組物を使用しない非装飾形式は 14 棟確認された。拝殿をともなうようなある程度の規模の本殿はいずれも19 世紀以降と判断された。細原八幡宮本殿（146-02：大野町：18 世紀前期）（図 3-2-6）は、小規模な見世棚造の本殿であるが、18 世紀に遡るとみられる。

切妻造妻入以外の本殿は、流造のものが４棟ある。もっとも建立年代が古いものは、天満宮本殿（517-06：鹿島町古浦：19 世紀前期）（図 3-2-7）で、絵様は 19 世紀から明治にかけての特徴を示す。全体に洗いをかけているのか材が新しくみえ、年代が下る可能性もある。

本殿以外の建築で年代の古いものとしては、内神社中門（179-11：大垣町：17 世紀中期）（図 3-2-8）、秋鹿神社随神門（156-02：秋鹿町：18 世紀後期）（図 3-2-9）がある。後者は、絵様は 18 世紀の様式を示すが、頭貫が薄く、擬古作の可能性もある。

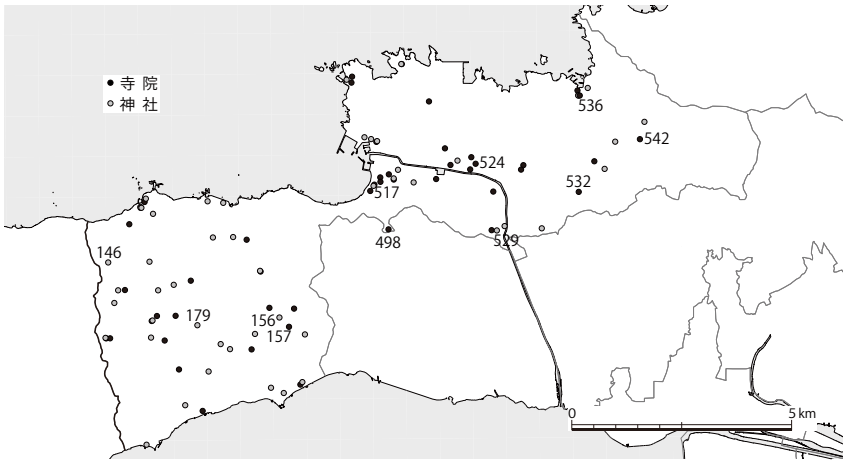

図 3-2-1　②日本海沿岸西部地区分布図

図 3-2-2　高祖寺本堂（157-01）

図 3-2-6　細原八幡宮本殿（146-02）

図 3-2-3　南正寺本堂（532-01）

図 3-2-7　天満宮本殿（517-06）

図 3-2-4　観潮寺本堂（536-01）

図 3-2-8　内神社中門（179-11）

図 3-2-5　常楽寺本堂・庫裏（542-01）

図 3-2-9　秋鹿神社随神門（156-02）

③中海北岸・東岸地区

当地区は、松江市北部のうち中海に面する地域にあり、本庄、川津、朝酌公民館区が含まれる。朝酌地区は大橋川に面する地域が多い。

調査で確認された物件数は寺院系 104 棟、神社系 114 棟、合計 218 棟である。

寺　院　宗教法人登録されている寺院は 13 件あり、内訳は、高野山真言宗（1）、天台宗（1）、浄土宗（1）、浄土真宗（1）、臨済宗（3）、曹洞宗（5）、単立（1）である。

当地域を代表する寺院として、華蔵寺（258：枕木町）がある。華蔵寺は、堀尾氏による松江城築城の際に祈願所として復興され、その後松平直政によって明暦３年（1657）に境内が整備されたという。境内には、市指定文化財である鐘楼門（258-08：明暦元年）（図 3-3-2）、お成りの間（258-20：18 世紀後期）、お成り門（258-21：18 世紀後期）、地蔵堂（258-20：19 世紀中期）をはじめとして、本堂（258-17：明和９年）（図 3-3-3）、開山堂（258-19：18 世紀後期）、庫裏（258-09：明和９年）、地蔵堂（258-01：18 世紀後期）、仁王門（258-02：18 世紀後期）（図 3-3-4）など、近世造営の大伽藍が保存されている。伽藍全体の詳細な調査が期待される。

本堂建築では、方丈型本堂が８棟、仏堂型が２棟、本堂庫裏一体型が１棟確認された。

方丈型本堂は、そのほとんどが禅宗方丈で、西宗寺本堂（351-02：上東川津町：平成）のみが浄土真宗である。建築年代が古いものとしては、前述の華蔵寺本堂の他、清安寺本堂（271-02：邑生町：18 世紀前期）（図 3-3-5）がある。ただし、軸部の柱は中古に入れ替えているようである。

仏堂型の本堂のうち、霊感寺本堂（376-01：西川津町：天保 15 年）（図 3-3-6）は、桁行５間長、梁間３間長の重層建築で、上層は近代に改変された可能性が高いが、特徴的な外観をもつ。

法人登録外の仏堂では、薬師堂本堂（369-01：西川津町：天保 14 年）（図 3-3-7）が古い。宝形造の三間堂で、数少ない茅葺仏堂の遺構である。

神　社　宗教法人登録されている神社は 19 件ある。

本殿建築では、切妻造妻入の社殿が 16 棟、切妻造平入が２棟、隅木入春日造が２棟、流造が５棟ある。切妻造妻入の社殿では、桁行１間の社殿がほとんどで、２間以上のものはわずかであった。18 世紀に遡るとみられる社殿は確認されなかった。

切妻造平入の社殿である熊野神社本殿（379-04：西川津町：17 世紀後期）（図 3-3-8）は、桁行３間の社殿であるが、中央間を広く取り、向拝を設ける形式である。絵様の年代も古く、松江市内では珍しい形式であり貴重である。

隅木入春日造造では、推恵神社本殿（377-04：西川津町：享保 14 年）（図 3-3-9）が 18 世紀に遡る。桁行２間、梁間２間の社殿で、彫刻の質も高く、如泥作とも伝えられている。

流造の社殿では、布自伎美神社本殿（349-03：上東川津町：19 世紀前期）（図 3-3-10）が本格的な流造の形式で、彫刻も豊富で良質である。

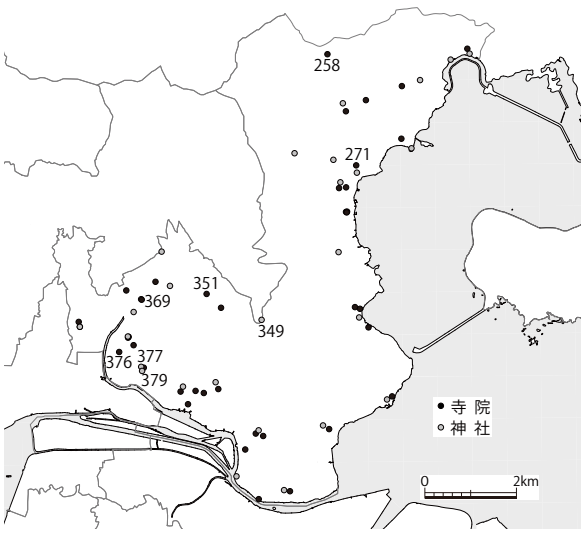

図 3-3-1　③中海北岸・東岸地区分布図

図 3-3-2　華蔵寺鐘楼門（258-08）

図 3-3-3　華蔵寺本堂（258-17）

図 3-3-7　薬師堂本堂（369-01）

図 3-3-4　華蔵寺仁王門（258-02）

図 3-3-8　熊野神社本殿（379-04）

図 3-3-5　清安寺本堂（271-02）

図 3-3-9　推恵神社本殿（377-04）

図 3-3-6　霊感寺本堂（376-01）

図 3-3-10　布自伎美神社本殿（349-03）

④旧城下町北地区

当地区は、近世松江城の旧城下町の北部にあたり、城東・城北・城西公民館区に相当する。松江城山内の神社も含まれており、本地区には松江藩との関わりをもつ寺社が多く存在する。調査で確認された物件数は217 棟で、寺院系 131 棟、神社系 86 棟である。

寺　院　宗教法人登録されている寺院は 23 件である。宗派別には、高野山真言宗（2）、法華宗（1）、天台宗（3）、浄土宗（2）、浄土真宗（6）、臨済宗（2）、曹洞宗（5）、単立（2）となり、他の地区と比較しても、多くの宗派の寺院が集まっており、禅宗寺院の割合が低いことがこの地区の特徴である。

当地区を代表する寺院として、松江藩歴代藩主の墓所である月照寺（112：外中原町）がある。すでに国史跡として敷地全体が指定されており、建造物も高真院（初代直政）廟門（112-08：延宝 7 年）（図 3-4-2）、大円庵（7 代治郷）廟門（112-09：文政 2 年）の 2 棟の廟門が県指定文化財に指定されている。その他についても、松江藩御大工の手によることが明らかであり、年代の指標として貴重な建築群である。

この他に年代が古い建築としては、法眼寺表門（315-01：外中原町：17 世紀中期）（図 3-4-3）がある。切妻造桟瓦葺の四脚門で、元文 3 年（1738）に鰐淵寺から移築されたと伝える。木鼻は、月照寺の廟門群にもみられる嘴状の特徴的な形状をもち、松江藩御大工との関わりが指摘できる。

当地区の本堂建築の建立年代は、そのほとんどが 19 世紀中期から明治期であり、桁行 6 間長前後の入母屋造平入の本堂が大半を占める。年代が古いものとしては、桐岳寺本堂（006-02：奥谷町：宝暦 8 年）（図 3-4-4）があり、18 世紀中期の建築である。

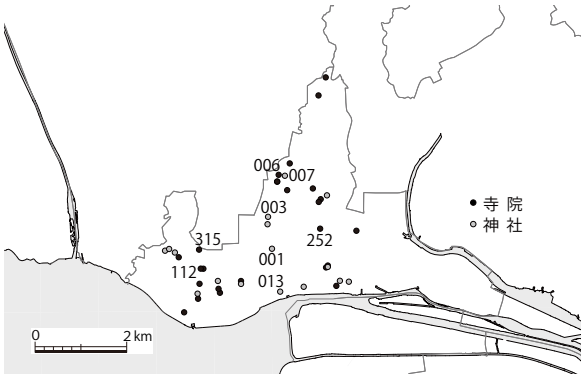

図 3-4-1　④旧城下町北地区分布図

宝形造の三間堂 3 棟はいずれも天台宗の本堂である。普門院本堂（252-02：北田町：享保 17 年）（図 3-4-5）は、前身堂焼失後に仮堂として建てられた堂で、現在は前面に前堂を増築している。本堂部は改変が多いものの、軸部は当初材を保存しており、建築当初の平面規模を伝える。

神　社　法人番号をもつ神社は 10 件ある。

松江城山の神社も含め、松江藩との関わりの深い神社が多い。松江神社（001：殿町）は、寛永 5 年に堀尾氏によって勧請された松江東照宮を明治 32 年（1899）に松江城二之丸内に移築したものである。本殿・通殿・拝殿（001-08・07・06：本殿・寛永 5 年、通殿拝殿・寛文元年）（図 3-4-6）は、桁行 3 間、梁間 3 間、入母屋造の本殿と、桁行 5 間、梁間 3 間、入母屋造の拝殿を通殿で接続した権現造の社殿で、地方大名による東照宮建築の遺構として重要である。

当地区内の本殿建築は、同型式の本殿 2 棟が並列する田原神社本殿を含めて合計 12 棟確認した。このうち、階隠をもつ切妻造妻入の社殿は 4 棟のみで、松江市全域と比較してその割合は低い。いずれも 19 世紀中期以降とみられ、18 世紀に遡る社殿は確認できなかった。

隅木入春日造では、田原神社本殿 2 棟（007-07・09：奥谷町：宝暦 4 年）（図 3-4-7）がある。第 2 章でも述べたとおり、2 棟の同形式の本堂を左右に並立させる様子は、美保神社本殿（615-14：美保関町美保関：文化 10 年）にみられる美保造と類似しており、複数等の本殿を並列する事例として注目される。

入母屋造の本殿は、松江神社本殿の他、稲荷神社本殿（003-07：殿町：18 世紀中期）（図 3-4-8）がある。桁行 3 間、梁間 2 間の社殿で、中央間に向拝が取り付く形式である。その他、流造と神明造の社殿が 1 棟ずつ確認されたが、いずれも昭和の建築である。

本殿以外で年代が古いものとしては、須衛都久神社住吉神社（013-07：西茶町：寛延 4 年）（図 3-4-9）がある。一間社隅木入春日造の社殿で、木鼻には月照寺の廟門群にみられる嘴状の特異な形状がみられ、松江藩御大工との関連が指摘される。

図 3-4-2　月照寺高真院（初代直政）廟門（112-08）

図 3-4-6　松江神社本殿・通殿・拝殿（001-06・07・08）

図 3-4-3　法眼寺表門（315-01）

図 3-4-7　田原神社本殿（007-07・09）

図 3-4-4　桐岳寺本堂（006-02）

図 3-4-8　稲荷神社本殿（003-07）

図 3-4-5　普門院本堂（252-02）

図 3-4-9　須衛都久神社住吉神社（013-07）

⑤松江市街地北縁地区

旧城下町の北側に広がる地域で、法吉・生馬・持田公民館区からなる。地区の西側には佐陀川が通り、古代より日本海側との往来が盛んであったという。

調査で確認した棟数は 144 棟で、うち寺院系が 50 棟、神社系が 94 棟である。

寺　院　宗教法人番号をもつ寺院は 10 件である。その宗派別内訳は、、法華宗（１）、天台宗（１）、曹洞宗（８）と、曹洞宗の寺院が大半である。

本堂建築のうち方丈型本堂は６棟あり、いずれも曹洞宗寺院の本堂である。建築年代が 18 世紀以前に遡るものはなく、19 世紀中期とみられる建築として、洞泉寺本堂（361-02：西持田町：19 世紀前期）（図 3-5-2)がある。桁行６間長の標準的な規模の建築であるが、向拝の屋根を身舎柱から裳階のように架けた特異な外観をもつ。

他の２棟の曹洞宗本堂は、いずれも本堂庫裏一体型である。吉祥寺本堂・庫裏（208-01：薗津町：19 世紀中期）（図 3-5-3）は、向かって左側５間分を本堂部分とし、右側は式台を設けずに土間高の出入口とし、二階を設ける。安養寺本堂（355-01：坂本町：19 世紀中期）（図 3-5-4）は、桁行７間半長の建物で、向かって左側５間半分を本堂部分とし、その右側２間部分に出入口を設けている。

仏堂型本堂は２棟あるが、いずれも 19 世紀前期から明治にかけての建物である。

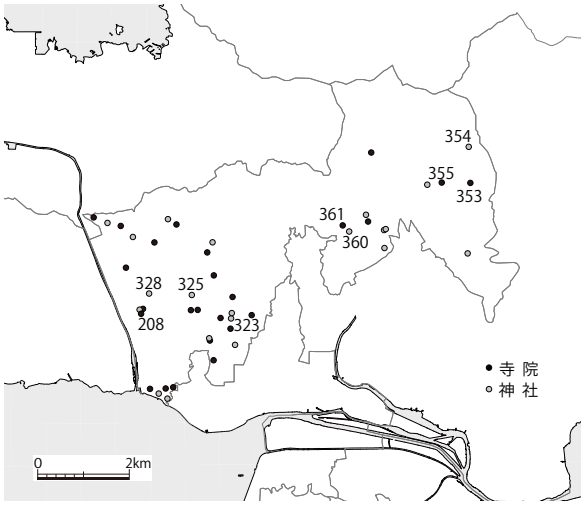

図 3-5-1　⑤松江市街地北縁地区分布図

その他、境内の仏堂建築として、長慶寺（澄水寺）観音堂（353-02：福原町：安永９年）（図 3-5-5）がある。宝形造の三間堂建築で、本堂を含めて当地区の仏堂建築の中ではもっとも古い。ただし、向拝は中古の可能性がある。

神　社　宗教法人番号をもつ神社は 16 件である。本殿建築は 20 棟確認し、切妻造妻入の社殿が 16 棟、流造が３棟、隅木入春日造が１棟である。

切妻造妻入の社殿は、桁行１間、梁間１間のものが 13 棟、桁行２間、梁間１間のものが１棟、桁行２間、梁間２間のものが２棟ある。また、組物を使用しない非装飾形式のものが９棟と、過半数を占めている。

年代の古いものとしては、虫野神社本殿（354-03：福原町：18 世紀中期）（図 3-5-6）があり、桁行１間、梁間１間の社殿として、松江市内でも古い部類に入る。また、持田神社本殿（360-06：西持田町：19 世紀中期）（図 3-5-7）は、桁行２間、梁間２間で、階隠を正面中央に配し、組物を用いない形式である。床下には、心柱位置と正面中央の宇豆柱位置に太い束を入れている。19 世紀前・中期とみられるものは、これらを含めて合計５棟確認している。

切妻造妻入の社殿が比較的新しいのに対して、流造の２棟は、いずれも 18 世紀に遡る。須賀神社本殿（323-03：春日町：18 世紀後期）（図 3-5-8）、八幡宮（328-07：下佐陀町：18 世紀中期）（図 3-5-9）で、いずれも一間社の社殿である。

隅木入春日造の本殿は、比津神社本殿（325-03：比津町：明治）（図 3-5-10）がある。一間社隅木入春日造で、組物に三斗組を使用する社殿である。

図 3-5-2　洞泉寺本堂（361-02）

図 3-5-3　吉祥寺本堂・庫裏（208-01）

図 3-5-7　持田神社本殿（360-06）

図 3-5-4　安養寺本堂・庫裏（355-01）

図 3-5-8　須賀神社本殿（323-03）

図 3-5-5　長慶寺（澄水寺）観音堂（353-02）

図 3-5-9　八幡宮本殿（328-07）

図 3-5-6　虫野神社本殿（354-03）

図 3-5-10　比津神社本殿（325-03）

⑥宍道湖北部地区

佐陀川から西の宍道湖に面した平野部のうち、東側の部分で、古江地区に相当する地域である。

調査で確認した棟数は 93 棟で、寺院系が 43 棟、神社系が 50 棟である。

寺　院　宗教法人登録のある寺院は６件と少なく、高野山真言宗、臨済宗、曹洞宗が２件ずつである。

本堂のうち、建築年代が近世に遡るものは、金剛寺本堂（191-02：東長江町：18 世紀後期）（図 3-6-2）と、道榮寺本堂・庫裏（199-04：古曽志町：天保２年）（図 3-6-3）の２棟のみである。金剛寺本堂は、桁行５間半長の方丈型本堂で、屋根の勾配がきつく、当初は茅葺であった可能性がある。道榮寺本堂は、本堂庫裏一体型の建物で、桁行 11 間長の長大な建物である。本来玄関部となる部分にも縁を廻し、成の高い差物を使用しており本堂庫裏一体型を代表する建築である。

本堂以外に年代の古いものとして、金剛寺観音堂（191-04：東長江町：18 世紀前期）（図 3-6-4）がある。金剛寺観音堂は、小規模の三間堂建築で、前述の金剛寺本堂と渡廊で接続されている。

神　社　宗教法人番号をもつ神社は８件ある。

本殿建築は、切妻造妻入のものが９棟、隅木入春日造のものが１棟ある。切妻造妻入の社殿では、桁行１間のものが５棟、桁行２間のものが４棟ある。階隠に三斗や絵様を使用するものも認められるが、本体部分に組物を使用しない形式が主流である。

年代の古いものとしては、弥多仁神社本殿（195-01：荘成町：18 世紀中期）（図 3-6-5）がある。弥多仁神社本殿は、本体部分は組物を使用しない形式であるが、階隠正面にのみ三斗組を使用する。ただし、頭貫が薄く、年代が下る可能性がある。

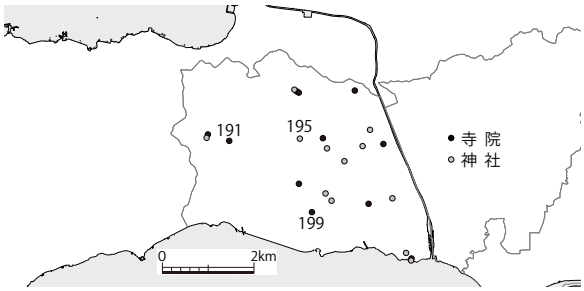

図 3-6-1　⑥宍道湖北部地区分布図

図 3-6-2　金剛寺本堂（191-02）

図 3-6-4　金剛寺観音堂（191-04）

図 3-6-3　道榮寺本堂・庫裏（199-04）

図 3-6-5　弥多仁神社本殿詳細（195-01）

⑦宍道湖南岸地区

松江市内のうち宍道湖の南岸に面する地域で、乃木・玉湯・宍道公民館区にあたる。旧宍道町、旧玉湯町に対応する。中国山地の北麓でもあり、来待川、玉湯川などが宍道湖へと流れ、地域の北部には比較的広い谷底平野や三角州がある。

調査物件数は、合計で 355 棟と多く、そのうち寺院系が 112 件、神社系が 243 件である。

寺　院　宗教法人登録されている寺院は 19 件ある。宗派別内訳は、高野山真言宗（２）、浄土宗（１）、時宗（１）、浄土真宗（１）、日蓮正宗（１）、臨済宗（２）、曹洞宗（11）で、多くの宗派の寺院が存在するなか、曹洞宗が６割以上を占めている。

本堂建築は、方丈型本堂が 10 棟、本堂庫裏一体型が６棟、仏堂型が２棟ある。

方丈型本堂は、ほとんどが桁行６間前後、梁間４間半前後であり、向拝の有無や縁の位置などの細かい違いはあるものの、ほぼ同規模の形式である。珍しい形式としては、弘長寺本堂（493-02：宍道町東来待：明治）（図 3-7-2）があり、桁行５間長の身舎に半間幅の裳階を取り付け、裳階正面中央間の屋根を葺き下ろして向拝を設けている。

年代の古いものとしては、善光寺本堂（086-05：浜乃木１丁目：19 世紀前期）（図 3-7-3）、了知寺本堂（475-05：玉湯町大谷：天保 15 年）、専称寺本堂（581-04：宍道町宍道：弘化３年）（図 3-7-4）がある。

当地区は、本堂庫裏一体型が６棟あり、他の地域と比べてもその割合が多い。また、身舎の四周や庫裏部分に下屋を設けており、他の地域の本堂庫裏一体型とは異なる特徴をもっている。年代の古いものとしては、妙岩寺本堂・庫裏（574-01：宍道町佐々布：文政４年）（図 3-7-5）がある。明治から大正にかけては４棟あり、清巌寺本堂・庫裏（471-01：玉湯町玉造：大正）（図 3-7-6）は、身舎全体に下屋を廻した上で、さらに玄関・庫裏部分に下屋を架けており、近代和風建築としても注目される。

仏堂型本堂はいずれも真言宗の寺院である。岩屋寺本堂（478-02：宍道町上来待：明治）（図 3-7-7）は方５間長の宝形造の建物で、切妻造の向拝が突出し、向拝内部は格天井を張る。

神　社　宗教法人登録される神社は 35 件である。

当地区を代表する神社として、来待神社（480：宍道町上来待）がある。本殿（480-05・07・09：文政６年）

図 3-7-2　弘長寺本堂（493-02）

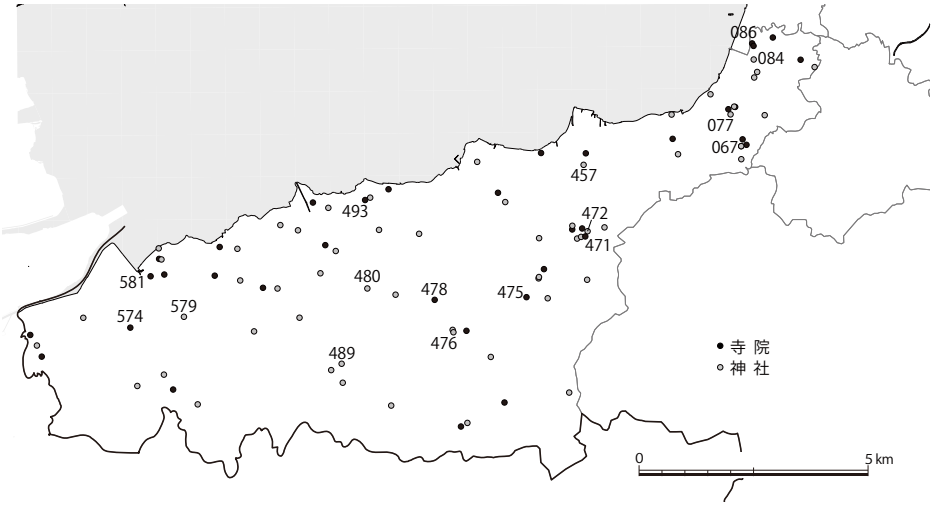

図 3-7-1　⑦宍道湖南岸地区分布図

は、桁行 1 間、梁間 1 間の切妻造妻入の社殿を 3 棟並立し、その間に渡廊を渡す。いずれも松江市指定文化財である。

調査で確認した本殿建築は 44 棟ある。建築形式は、切妻造妻入の本殿が 34 棟、切妻造平入が 1 棟、流造が 7 棟（ＲＣ造を省く）であった。

切妻造妻入の社殿では、桁行 1 間のものが 29 棟と多く、桁行 2 間のものは 5 棟であった。桁行 1 間の本殿では、小規模の祠を含めて組物を使用しない非装飾形式の社殿は 6 棟のみで、他は組物を使用している。

年代の古いものとしては、野白神社本殿（067-05：乃白町：18 世紀後期）（図 3-7-9）、福富神社本殿（077-03：乃木福富町：18 世紀中期）（図 3-7-10）、本宮神社本殿（476-04：宍道町上来待：17 世紀末期・明治大修理）がある。本宮神社本殿は、絵様の様相は古式を示しているが、軸部は明治頃に大改修がなされた可能性がある。なお、本宮神社は、本殿の脇に摂社（476-06：17 世紀中期、明治大修理）（図 3-7-11）がある。小規模な 1 間社流造で、本殿に比して簡素であるが、絵様の形状は古く、本殿よりも年代が遡る可能性がある。

図 3-7-3　善光寺本堂（086-05）

図 3-7-6　清巌寺本堂・庫裏（471-01）

図 3-7-4　専称寺本堂（581-04）

図 3-7-7　岩屋寺本堂（478-02）

図 3-7-5　妙岩寺本堂・庫裏（574-01）

図 3-7-8　来待神社本殿（480-05・07・09）

桁行２間のものはいずれも階隠を中央に置く形式で、２棟は組物を用いない非装飾形式である。年代の古いものとして、佐為神社本殿（579-04：宍道町白石：享保３年）（図 3-7-12）がある。また、玉作湯神社本殿（472-12：玉湯町玉造：安政４年）は、組物を出組とし、中備に蟇股を入れ、妻飾の笈形も含め非常に装飾性が高い。

流造の本殿建築は、１間社が６棟、３間社が１棟ある。年代の古いものとしては、菅原天満宮本殿（489-06：宍道町上来待：貞享５年）がある。組物は大斗肘木で簡素であるが、絵様は古式を示しており、社伝では寛文３年（1663）に直政公による造営とするが、様式からは 17 世紀前期に遡る可能性がある。八幡宮本殿（457-09：玉湯町湯町：文化 12 年）（図 3-7-13）は、梁間２間に前室の付いた３間社本殿である。蟇股や妻飾の彫刻が豊かでしっかりとしたつくりの社殿である。

本殿建築以外の建物では、年代の古いものとして、野代神社随神門（084-02：浜乃木２丁目：18 世紀中期）（図 3-7-14）がある。中央間に虹梁とその上に蟇股を置くのみで、組物や木鼻などのない形式である。

図 3-7-9　野白神社本殿（067-05）

図 3-7-10　福富神社本殿（077-03）

図 3-7-11　本宮神社摂社（476-06）

図 3-7-12　佐為神社本殿（579-04）

図 3-7-13　八幡宮本殿（457-09）

図 3-7-14　野代神社随神門（084-02）

⑧旧城下町南地区

松江城の旧城下町のうち、大橋川より南の部分に当たる地域で、白潟・雑賀・朝日公民館区に相当する。松江城城下町の中でも寺町とその周辺を含む地域でもあり、面積は他の地域と比較してもかなり狭いが、寺院が集中する場所である。

悉皆調査では合計 188 棟を確認し、そのうち寺院系は 136 棟、神社系は 52 棟と、７割以上が寺院系の建物である。

寺　院　宗教法人登録されている寺院は36件ある。宗派別内訳は、高野山真言宗（１）、浄土宗（７）、浄土真宗（12）、日蓮宗（６）、臨済宗（１）、曹洞宗（９）である。他の地域では禅宗寺院が大多数を占めるが、当地域では浄土宗、日蓮宗、浄土真宗の寺院も多く、曹洞宗の割合は低い。また、密教系の寺院も少なく、わずかに確認した真言宗の寺院も、近代に設けられた教化センターのみである。『松江市史』[1] でも指摘されているところであるが、宗派の割合が他の地域と異なる理由としては、松江城下で生活する人々の中で、禅宗以外の檀徒の割合が高かったことがいえる。また、密教系寺院は松江藩の祈祷寺を担っており、城下町北部に配されていたことも述べられている。

当地区は近世を通じて火災の記録が多く残っており、中でも天保８年（1837）の大火（灘町大火）では、白潟灘町から出火・延焼し、商家 751 軒、寺院 15 焼失と記録されている[2]。そのため、建立年代が 18 世紀以前の建築はほとんど確認できず、その多くが 19 世紀前期から明治にかけて建てられたものである。わずかに信楽寺表門（214-01：堅町：18 世紀後期）（図 3-8-2）が、18 世紀に遡るとみられるが、第２章で述べた通り 18 世紀後期から明治にかけての絵様の年代観は詳細な検討が必要であり、19 世紀以降に下る可能性も残る。

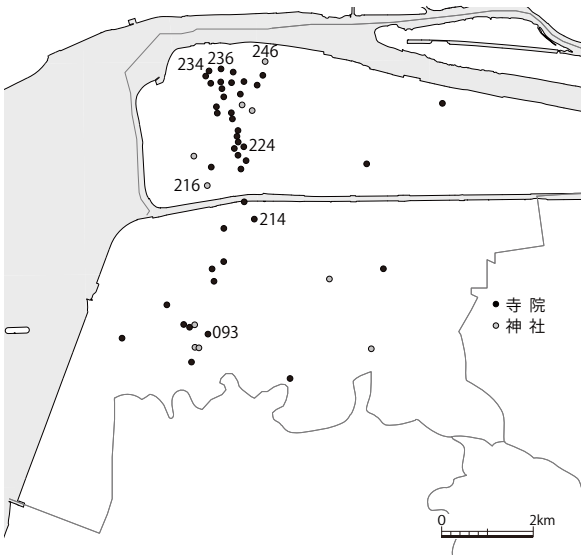

図 3-8-1　⑧旧城下町南地区分布図

本堂建築は 34 棟確認し、そのうち 30 棟が方丈型本堂で、他はＲＣ造等であった。本堂庫裏一体型や仏堂型本堂は確認できなかった。

方丈型本堂は、桁行６間前後、梁間５間前後、入母屋造、桟瓦葺のものが主流である。大規模なものとしては、洞光寺本堂（093-02：新町：弘化２年）（図 3-8-3）があり、桁行８間長、梁間６間長の本堂の正面に、入母屋造の屋根を備えた向拝を設ける。また、本龍寺本堂（236-01：和多見町：文政５年）（図 3-8-4）は、桁行６間半長、梁間６間長の標準的な規模の本堂であるが、向拝を３間として各間に虹梁を入れており、木鼻や中備などの彫刻が豊富である。

また、当地区の本堂建築の特徴として、脇間の低い位置に中敷居を入れ腰高窓とする例が７棟確認された。圓照寺本堂（224-01：寺町：19 世紀前期）（図 3-8-5）や西光寺本堂（234-01：和多見町：明治）（図 3-8-6）など、寺町及び和多見町の極めて限られた地域にだけ分布しており、局所的な流行があったものと思われる。

神　社　宗教法人登録されている神社は５件のみである。このうち、白潟天満宮（216：天神町）は堀尾氏以降、松江藩により造営がなされた神社である。本殿拝殿は明治期の建物であるが、境内社の厳島神社

図 3-8-2　信楽寺表門（214-01）

（216-05：天明５年）（図 3-8-7）は、18 世紀後期に遡る。厳島神社は、一間社隅木入春日造の中規模の建築であるが、隅部は化粧隅木を入れずに垂木を組んで処理する大変珍しい手法を用いている。さらに、木鼻には、月照寺廟門にもみられる嘴状の特徴的な形状が確認でき、松江藩御大工が手掛けた建築の可能性が高く、詳細な調査が求められる。

本殿建築は、いずれも切妻造妻入の社殿で、桁行１間のものが２棟、桁行２間のものが３棟であった。そのうち組物を用いない非装飾形式の本殿が４棟あり、いずれも明治以降に建てられたものである。もっとも古い本殿建築は賣布神社本殿（246-08：和多見町：嘉永７年）（図 3-8-8）である。桁行１間の社殿で、組物は出組を使用し、身舎柱を繋ぐ頭貫には見付面にも彫刻を施し、妻面を埋めつくす龍の彫刻と合わせ、装飾性の高い社殿である。

註

1）『松江市誌』松江市、1941 年。
2）前掲註１。

図 3-8-3　洞光寺本堂（093-02）

図 3-8-4　本龍寺本堂（236-01）

図 3-8-5　圓照寺本堂（224-01）

図 3-8-6　腰高窓（西光寺本堂）（234-01）

図 3-8-7　白潟天満宮厳島神社（216-05）

図 3-8-8　賣布神社本殿（246-08）

⑨松江市街地南郊地区

当地区は、古志原･大庭公民館区により構成される。旧意宇郡東部の北側にあたり、有力な神社も集中する地域である。

悉皆調査では、96 棟を確認しており、寺院系は 31 棟、神社系は 65 棟と、三分の二を神社建築が占めている。他の地区に比して面積も小さいため、物件数は多くない。

寺　院　　宗教法人登録されている寺院は 5 件のみで、宗派別内訳は、高野山真言宗（1）、曹洞宗（4）である。

本堂は、方丈型が 2 棟、本堂庫裏一体型が 1 棟、仏堂型が 1 棟で、他はＲＣ造の建物である。

本堂建築では、18 世紀以前の年代の古いものは確認されず､浄音寺本堂（028-01:大庭町:19 世紀中期）（図 3-9-2）が 19 世紀中期でもっとも古い本堂建築である。浄音寺本堂は、桁行 3 間、梁間 4 間、宝形造の建物で、方三間の前面に前室を付けた仏堂型の平面形式をとる。瑞雲寺本堂・庫裏（019-01：大草町：大正）（図 3-9-3・4）は、桁行 7 間長の本堂庫裏一体型の建物で、玄関部分はなく､本堂部分の脇に庫裏の出入口を開く。本堂部は縁を設けず中央間に向拝を設けるのみとする。本堂庫裏一体型の建物の中では小規模な部類であるが、庫裏部分の欄間の位置が本堂部よりも高く、内部は庫裏部分のみ二階建としている可能性がある。

その他、本堂以外の建物も含め、昭和後期以降の近年に建てられた物件が大半である。

神　社　　法人登録されている神社は 6 件である。

当地区には、意宇六社のうち、六所神社（016：大草町）、神魂神社（025：大庭町）、八重垣神社（030：佐草町）、真名井神社（060：山代町）の四社が集中している。これらの神社には国および県指定文化財も含まれている。

神魂神社本殿（025-03：大庭町：国宝：天正 11 年）（図 3-9-5）は、切妻造妻入の大社造の建築で、国宝に指定されている。また､真名井神社本殿（060-03:山代町:県指定文化財：寛文 2 年）（図 3-9-6）も、同型式で県指定文化財である。この他、六所神社本殿（016-05：大草町：明治）（図 3-9-7）、八重垣神社本殿（030-09：佐

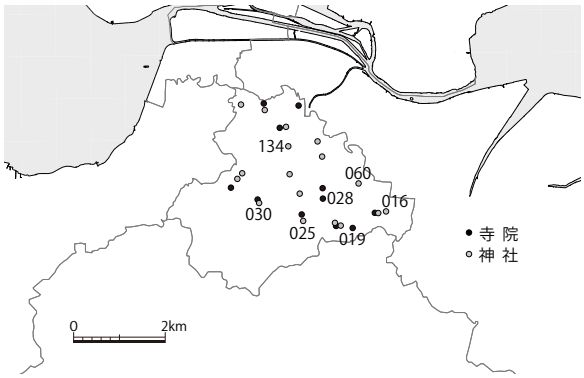

図 3-9-1　⑨松江市街地南郊地区分布図

図 3-9-3　瑞雲寺本堂・庫裏（019-01）

図 3-9-2　浄音寺本堂（028-01）

図 3-9-4　瑞雲寺本堂・庫裏詳細（019-01）

草町：安政６年）（図 3-9-8）の意宇六社の本殿建築は、いずれも桁行２間、梁間２間、正面の片側１間に階隠をもつ形式で、正味の大社造の形式である。第２章でも述べた通り、この形式の社殿は、非装飾形式であることが基本である。

その他の本殿建築は、いずれも切妻造妻入、桁行１間の社殿である。山代神社本殿（134-07：古志原６丁目：天保４年）（図 3-9-9）は、三斗組を用い、長押や台輪には八双金具を用いるなど装飾形式の社殿であり、非装飾形式の多い当地区の中では少数の部類である。

本殿以外の神社建築では、神魂神社末社貴布祢稲荷両神社本殿（025-04：大庭町：重要文化財：天正 11 年）（図 3-9-10）が、国指定重要文化財に指定されている。当社殿は、神魂神社本殿の脇に建つ二間社流造の建物で、木階をもたない見世棚形式の社殿である。

図 3-9-5　神魂神社本殿（025-03）

図 3-9-8　八重垣神社本殿（030-09）

図 3-9-6　真名井神社本殿（060-03）

図 3-9-9　山代神社本殿（134-07）

図 3-9-7　六所神社本殿（016-05）

図 3-9-10　神魂神社末社貴布祢稲荷両神社本殿（025-04）

⑩中海南岸地区

当地区は、松江市の南東部で、中海に面する地域である。東出雲・竹矢・津田公民館区に相当し、旧東出雲町が当地区に含まれる。中海に面した地域は平地が広がり、南は中国山地北麓まで広がる。

悉皆調査では合計 279 棟を確認し、そのうち寺院系は 103 棟、神社系は 176 棟である。

寺　院　宗教法人登録されている寺院は 14 件である。宗派別にみると、高野山真言宗（４）、浄土宗（１）、日蓮宗（１）、臨済宗（３）、曹洞宗（４）、単立（１）である。他の地域に比べて真言宗寺院の割合が多い地域で、東泉寺（384：東出雲町揖屋町）のように、広大な境内をもつ寺院も存在する。

本堂建築は、方丈型本堂が８棟、本堂庫裏一体型および本堂玄関一体型が２棟、仏堂型が１棟で、他はＲＣ造などである。

方丈型本堂はいずれも標準的な形式のものである。年代が古いものはほとんどなく、宗淵寺本堂（414-02：東出雲町出雲郷：天保 14 年）（図 3-10-2）が唯一近世の建築である。桁行６間長で、端間には花頭窓を入れ、脇間には斜め格子の欄間を嵌め、近世末期らしい意匠の建物である。

本堂庫裏一体型・本堂玄関一体型は、迎接寺本堂・庫裏（051-02：八幡町：大正）、宗昌寺本堂・玄関（401-01：東出雲町下意東：明治）（図 3-10-3）がある。宗昌寺本堂・玄関は、桁行６間半長の向かって右端２間部分に下屋をつくり式台を設け、玄関とする。前身建物が弘化元年（1844）に焼失した後に再建されたものという。一体型の建築の中でも年代が確かであり、指標のひとつと位置づけられる。

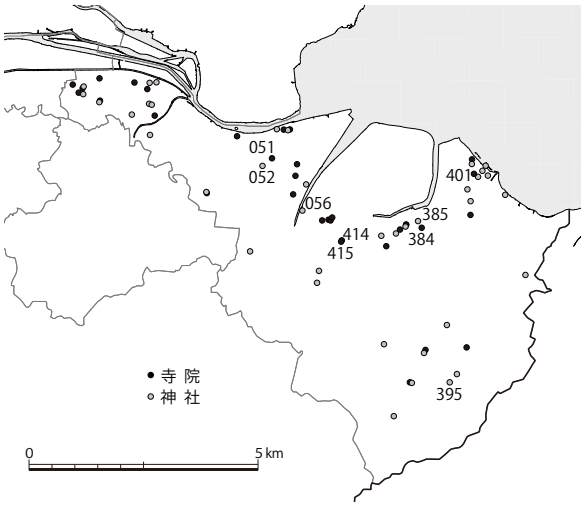

図 3-10-1　⑩中海南岸地区分布図

仏堂型本堂は、願興寺観音堂（本堂）（415-01：東出雲町出雲郷：19 世紀中期）（図 3-10-4）がある。方三間、宝形造の三間堂建築である。身舎中央間に虹梁型の差物を入れ、木鼻や向拝などに彫刻が多用されており、装飾性の豊かな建物である。

本堂建築以外で年代が古い建物では、迎接寺護摩堂（051-03：八幡町：17 世紀中期）（図 3-10-5）が 17 世紀に遡るとみられる。迎接寺護摩堂は、桁行３間、梁間３間、切妻造の仏堂で、身舎中央間の差物の絵様は古式であり、全体としては後補材が多いものの、軸部は当初材を保存している。また、屋根は現在切妻造であるが、桁行と梁行の規模が同じく、当初は宝形造であったと考えられる。

また、東泉寺護摩堂（384-09：東出雲町揖屋町：享保 13 年）（図 3-10-6）は、方三間、宝形造の三間堂仏堂である。文献資料[1)]によると松江藩により造営されており、御大工との関わりが注目される。なお、仏堂建築ではないが、東泉寺境内には稲荷大明神本殿（384-12：明和５年）（図 3-10-7）がある。桁行１間、梁間１間、切妻造妻入の社殿で、絵様の形状からも 17 世紀の建築と判断される。

神　社　宗教法人登録されている神社は 17 件ある。意宇六社のひとつである揖夜神社（385：東出雲町揖屋町）や、ホーランエンヤの御神輿の到着地である阿太加夜神社（056：東出雲町出雲郷）など、有力な神社が集中する地域でもある。

図 3-10-2　宗淵寺本堂（414-02）

図 3-10-3　宗昌寺本堂・玄関（401-01）

図 3-10-7　東泉寺稲荷大明神本殿（384-12）

図 3-10-4　願興寺観音堂（415-01）

図 3-10-8　阿太加夜神社本殿（056-07）

図 3-10-5　迎接寺護摩堂（051-03）

図 3-10-9　揖夜神社本殿（385-13）

図 3-10-6　東泉寺護摩堂（384-09）

図 3-10-10　平浜八幡宮本殿（052-08）

本殿建築は、大社造を含む切妻造妻入の社殿が 14 棟、流造が２棟確認された。

切妻造妻入の社殿では、大社造が２棟、桁行２間の社殿が３棟、桁行１間の社殿が 16 棟ある。

大社造の社殿は、阿太加夜神社本殿（056-07：東出雲町出雲郷：明治）（図 3-10-8）、揖夜神社本殿（385-13：東出雲町揖屋町：昭和前期）（図 3-10-9）がある。第２章でも述べた通り、意宇六社の本殿建築は、年代が下っても正味の大社造を踏襲している。

桁行２間の社殿では、組物を用いない非装飾形式が１棟、組物を使用するものが２棟である。また、桁行１間のものは、組物を使用しない非装飾形式の社殿が 11 棟と半数以上を占める。いずれも 18 世紀以前に遡る社殿は確認されなかった。

流造は、１間社が１棟、三間社が１棟である。平浜八幡宮本殿（052-08：八幡町：文化 15 年）（図 3-10-10）は梁間２間に前室が付属する三間社社殿である。規模も大きく、装飾も上質である。松江藩直轄の神社であり、松江藩御大工が造営に関わっていた可能性が高い。

本殿建築以外に注目される神社としては、金刀比羅神社（395：東出雲町上意東）がある。本殿（395-07：明治 12 年）（図 3-10-11）、拝殿（385-05:明治 12 年）（図 3-10-12）、随神門（395-02：明治 12 年）（図 3-10-13）、手水舎（395-01：明治 12 年）（図 3-10-14）等、明治 12 年に境内の建築を整備した、近代の建築群である。本殿は桁行２間の切妻造妻入の社殿であるが、組物に二手先を用い、装飾も豊かである。その他の建築も上質であり、技術的には近世末期の秀作群といえよう。

註

1）長瀬学英『風土記時代と律令の東出雲町・東泉寺沿革史』1985 年。

図 3-10-11　金刀比羅神社本殿（395-07）

図 3-10-12　金刀比羅神社拝殿（395-05）

図 3-10-13　金刀比羅神社随神門（395-02）

図 3-10-14　金刀比羅神社手水舎（395-01）

⑪大根島・江島地区

当地区は、旧八束町である大根島・江島の地域である。調査で確認した物件は、合計で 70 棟ともっとも少なく、寺院系 35 棟、神社系 35 棟である。

寺　院　当地域において特徴的なものとして、各地区に２間四方程度の「堂」が建てられていることがあげられる。『八束町誌』（八束町教育委員会、1992 年）によると、各堂には弘法大師像を安置し、旧暦３月には弘法大師祭が盛大におこなわれていたという。その形状は各堂で様々であるが、正面半間部分に壁を入れず、開放型とするものが多く確認される。このような堂は、合計 13 棟を確認している。いずれも昭和後期以降の建築である。このうち、規模の大きなものとしては、桁行３間長の波入地区の堂（682-01：八束町波入：昭和前期）（図 3-11-2）、桁行２間長の長福寺堂（673-01：八束町馬渡：平成２年）（図 3-11-3）がある。

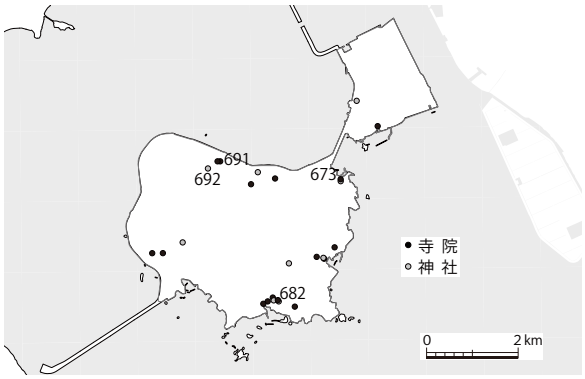

図 3-11-1　⑪大根島・江島地区分布図

図 3-11-2　波入地区の堂（682-01）

図 3-11-3　長福寺堂（673-01）

宗教法人登録されている寺院は３件のみで、内訳は臨済宗（１）、曹洞宗（２）である。建築年代の古い建物は少なく、善慶寺境内の堂（691-03：八束町二子：18 世紀後期）（図 3-11-4）が、唯一 18 世紀に遡るとみられる。方一間半の小規模な建物で、台輪より上は後補材で改変が著しい。

神　社　宗教法人登録されている神社は４件である。そのほとんどが昭和前期以降に建てられたもので、18 世紀以前に遡る建築は確認できなかった。

本殿建築は４社とも、桁行１間、梁間１間、切妻造妻入で、出組を使用する。地神神社本殿（692-03：八束町二子：19 世紀前期）（図 3-11-5）は、頭貫木鼻や妻面に彫刻を多用した装飾形式の社殿である。

図 3-11-4　善慶寺境内の堂（691-03）

図 3-11-5　地神神社本殿（692-03）

⑫中国山地北麓地区

当地区は松江市の南端部分にあたり、忌部・八雲公民館区に相当する。旧八雲村に位置する熊野大社は、出雲大社と並び出雲国一宮とされた意宇六社のひとつである。

悉皆調査では、合計 163 棟が確認されている。そのうち、寺院系は 53 棟、神社系は 110 棟と、三分の二が神社系の建築である。

寺　院　宗教法人登録されている寺院は全体で 12 件である。宗派別内訳は、真言宗（1）、臨済宗（2）、曹洞宗（8）、単立（1）となっており、曹洞宗の寺院が大半を占める。

本堂建築は、方丈型が 5 棟、本堂玄関一体型が 2 棟、仏堂型が 2 棟である。

方丈型本堂はいずれも桁行 6 間程度の標準的な規模の建築で、18 世紀以前の建築は確認できなかった。

本堂玄関一体型は、慈恩寺本堂・玄関（032-01：東忌部町：19 世紀前期）（図 3-12-2）と、観音寺本堂・玄関（042-02：西忌部町：19 世紀前期）（図 3-12-3）があり、いずれも 19 世紀前期の建物である。前者は、本堂部分の脇に下屋を突出させて出入口を設けた形式とし、後者は下屋とせずに出入口を設ける形式である。

その他、近世に遡る建築としては、松江市指定文化財である、星上寺仁王門（426-01：八雲町東岩坂：市指定文化財：19 世紀中期）（図 3-12-4）がある。桁行 3 間、梁間 2 間の茅葺の門で、数時期の絵様が確認されるが、主体部は 19 世紀中期であろう。

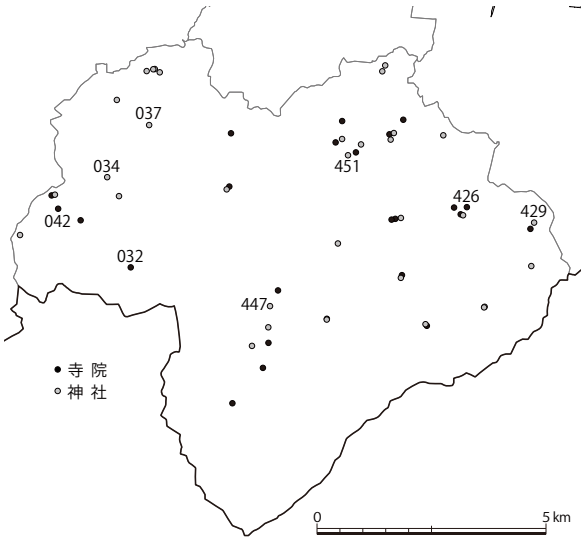

図 3-12-1　⑫中国山地北麓地区分布図

神　社　宗教法人登録されている神社は 12 件である。

本殿建築は 18 棟確認している。そのうち、正味の大社造を含む切妻造妻入の社殿は 14 棟あり、その他に隅木入春日造が 1 棟、流造が 3 棟ある。

切妻造妻入の社殿のうち、大社造は 2 棟確認した。意宇六社である熊野大社本殿（447-08：八雲町熊野：昭和 22 年）（図 3-12-5）は、戦後に再建された社殿であるが、意宇六社の他の社殿と同様に、組物を一切用いない正味の大社造の社殿である。また、磐坂神社本殿（451-04：八雲町西岩坂：19 世紀中期）（図 3-12-6）は、本体部は組物を使用していないが、階隠の正面側に三斗組を使用している。

桁行 2 間の社殿は 4 棟あり、すべて組物を使用しない非装飾形式の社殿で、幕末から明治にかけて建てられたものである。また、桁行 1 間の社殿は 8 棟確認したが、多くが祠のような小規模の社殿であった。その中でも、久多美神社本殿（037-03：東忌部町：18 世紀後期）（図 3-12-7）は、三斗組を使用した装飾形式の社殿で、妻面いっぱいに大きな蟇股を備え、向拝も含め彫刻を多用している。

隅木入春日造の社殿は、忌部神社本殿（034-07：東忌部町：文政 3 年）（図 3-12-8）を確認した。桁行 2 間、梁間 2 間の社殿で、庇を前方に長く延ばし、途中に柱を入れて繋梁を二段入れる形式である。

流造の本殿はいずれも 1 間社である。那富乃夜神社本殿（429-03：八雲町東岩坂：19 世紀中期）は、しっかりとしたつくりの建築であり、棟札等を含めた詳細な調査を期待する。

その他、年代が古い物件としては、忌部神社随神門（034-02：東忌部町：18 世紀後期）（図 3-12-9）がある。

図 3-12-2　慈恩寺本堂・玄関（032-01）

図 3-12-6　磐坂神社本殿（451-04）

図 3-12-3　観音寺本堂・玄関（042-02）

図 3-12-7　久多美神社本殿（037-03）

図 3-12-4　星上寺仁王門（426-01）

図 3-12-8　忌部神社本殿（034-07）

図 3-12-5　熊野大社本殿（447-08）

図 3-12-9　忌部神社随神門（034-02）